

陳 述 録 取 書

令和8年（2026年）8月10日

大阪地方裁判所第17民事部3E 係 御中

原告訴訟代理人 弁護士 江 上 武 幸



原告は、令和8年6月28日午前2時過ぎ、新聞配達中にバイクで転倒し路面で頭を強打し、[redacted]にて緊急手術を受け、現在、[redacted]リハビリテーション病院にて入院加療中です。当職は、事故前の令和8年2月11日（水）に神戸市内で原告と面談し、陳述書作成のための事情聴取を行っていたため、その陳述内容に基づき陳述録取書を作成し提出することとします。

1 経歴等について

私は、昭和39年（1964年）4月23日、岡山県[redacted]に生まれました。兼業農家を営む父と母、6歳年下の妹と祖母の5人家族でした。父は80歳代で他界し、母（当年85歳）は高齢のため、現在、[redacted]で学校教師をしている妹のもとで生活しています。

[redacted]小学校・[redacted]中学校、県立[redacted]高校を経て下関市立大学経済学部に入學し、大學卒業後は東急車輛製造株式会社（横浜市金沢八景）に入社し本社企画部門に約10年間勤務しました。

同社を退職したのは、実家の両親がトラクターの下敷きになり、父は足を骨折し母は背骨を圧迫骨折するという事故が発生し、認知症の祖母の面倒をみる者が誰もいないため実家にもどることにしたからです。岡山県[redacted]にある[redacted]という会社に2年間ほど勤務し家事全般をみてきましたが、両親の怪我也だいぶよくなりましたので他に職を求めることにし、毎日新聞配達店の求人広告をみて大阪府[redacted]にある「毎日新聞[redacted]販売所」に就職しました。

2 販売店経営を始めるに至った経緯について

[redacted]販売所で配達・集金・拡張業務に従事して3年目にはいった頃、社長から独立をすすめられました。独立資金がないことを話すと本社の研修店舗で働きながら開業資金を積み立てる制度を紹介されました。それで、兵庫

県にある研修店舗「~~〇〇〇〇~~販売所」(~~〇〇〇〇~~所長)で働きながら独立資金を貯めることにしました。

将来、販売店経営者になる人材を養成する研修店で働いていましたので、毎日新聞社販売店に大量の押し紙があることは知っていました。そうしているうちに、本社販売部の~~〇〇〇〇~~副部長(当時)から、神戸市~~〇〇〇〇~~区の「~~〇〇〇〇~~販売所」の引き継ぎを打診されました。新聞販売店の経営が目的でしたので、すすめられるまま自己資金と本社の新店貸付金(約300万円)を借り受けて~~〇〇〇〇~~販売所の経営を引き継ぐことにしました。しかし、実際に経営を始めてみると、~~〇〇〇〇~~地区は購読者の高齢化が進んでおり読者数もあまり多くないいわば不良店でした。

私が~~〇〇〇〇~~販売店の経営に苦労していることを知った~~〇〇〇〇~~販売所の~~〇〇〇〇~~所長が本社販売部に掛け合ってくれた結果、他に条件のいい販売店を探してもらうことになりました。その結果、~~〇〇〇〇~~さんという人が経営する「~~〇〇〇〇~~販売所」を紹介されそこを引き継ぐことにしました。代償金は556万円で尼崎信用金庫からの融資と本社貸付金で経営を譲り受けました。

3 販売店経営の状況について

私は、平成26年4月から~~〇〇〇〇~~販売所の経営を始めました。翌年の平成27年7月からは~~〇〇〇〇~~販売所と~~〇〇〇〇~~販売所の一部の区域を譲り受けました。当時は朝日新聞のいわゆる従軍慰安婦問題があり、朝日新聞から毎日新聞へ購読紙を切り替える人が多く一時的に200部ほど増やすことができました。

平成29年12月からは、本社の~~〇〇〇〇~~副部長(当時)から頼まれて~~〇〇〇〇~~さんという人が経営している「~~〇〇〇〇~~販売所」の経営を引き継ぎました。代償金282万円は芦屋信用金庫から借り入れました。

平成30年9月からは、同じく本社の~~〇〇〇〇~~部長から頼まれて~~〇〇〇〇~~さんという人が経営している「~~〇〇〇〇~~販売所」の経営を引き継ぎました。代償金478万円は芦屋信用金庫からの借入と本社の新店貸付金で支払いました。

私はこのように廃業予定の販売店の経営の引き継ぎを本社から頼まれ経営を広げてきましたが、引き継いだ販売店はどこも実配数を超える新聞を大量に抱えて経営に行き詰まった店ばかりでした。

経営を引き継いだ店は翌月とか翌々月には本社が一定部数を減紙してくれましたが、私には減紙の部数を決める権限はありませんでした。残紙は「~~〇〇〇〇~~」・「~~〇〇〇〇~~」・「~~〇〇〇〇~~」といった古紙回収業者に引き取ってもらいました。

4 注文方法と送り部数について

他の新聞社の場合、販売店はFAXやメールで部数を書いて会社にするようになっていたようですが、毎日新聞社の場合はそのような制度はありません。販売店に何部を送るか、何部増やすか、何部減らすかは本社が決めています。

私たち販売店は、経営を始めた時から販売所ごとに「入れ止め」の部数報告を義務づけられており（甲A9参照）、担当も訪店の時に聞いていますので、本社は販売店が経営を始めた時からの実配数の増減は正確に知っています。本社が送り部数を増やす時は、担当から「〇月入力で〇部増やしてください。増やした分は必ず補助金で穴埋めする。」といって仕入れ部数を増やすよう頼まれます。私達は担当の頼みを無下に断ることはできません。担当も本社から指示されて無理な増紙を頼んでいるのがわかりますので、担当の頼みを断ってぎくしゃくすれば販売店経営は続けていけません。

担当は1部でも送り部数が増えると成績につながるからと思いますが、入り止めの差の入りの方が大きいとその分送り部数を増やしますし、反対に止めの方が多い場合でも送り部数を減らすことはしません。

5 小切手による支払いと補助金の未払いについて

仕入れ代金の支払いは私の場合は小切手で支払っていました。「完納奨励金」という制度が設けられており、契約書（乙1）の第4条に書かれている毎月25日までに全額支払うと「完納奨励金」を得ることができます。完納奨励金も他の奨励金と同じように現金で支払われるものではありません。完納奨励金は翌月の請求金額からその金額が減らされる仕組みです。

私は、担当から指示された金額を書いた小切手を25日付で担当にわたすようになっていました。それから購読料の集金を始めて翌月の10日の支払期日までに小切手に書いた支払金額が準備できれば完納し奨励金がもらえます。小切手の場合は振り出した日に支払ったようにしてもらえますので支払期日までのタイムラグを利用して新聞代を集金して支払金を準備することができます。小切手に書いた金額が準備できないときは銀行から融資を受けて不渡りにならないようにします。

私は担当から販売店ごとに指示された金額を3店まとめて1枚の小切手に記載して渡します。請求金額より小切手に記入する金額が少ないのですが、その分は本社が「補助金」で補填する約束でした。

最初の頃は約束通り不足額は本社が補助金を支給して補填していましたので、月の未払いは0円でした。

被告の準備書面（3）の一覧表をみると、平成27年8月から平成29年2月にかけて補助金の未払い額は472万円になっていますが、3月に52

7万の補助金が支給され未払いは0円になっています。

ところで、令和元年7月頃の経済不況や、令和2年4月頃から始まった新型コロナウイルスの流行でコロナウイルスが付着しているかもしれないと心配した読者からの契約解除の申し出が相次ぎ、また、緊急事態宣言の発令でスーパーや家電量販店、パチンコ店などあらゆる業界から折込チラシの注文がなくなり経営が成り立たなくなりました。本社の経営状態も悪くなったように補助金は全額カットされた状態が続き、担当から指示された小切手に記した金額の用意もできない状況になり、銀行借入でなんとか小切手が不渡りにならないようにしてきました。

毎月の請求書に記載された総請求金額の数字がはねあがってきますので心配になり担当に尋ねると、「いずれ、経営状態がよくなれば補助金で清算するから心配しないように」という返事であり、他の販売店経営者からも同じような話を聞いていましたので安心していました

6 廃業に至る経緯

コロナ禍の発生から最初の2ヶ月間ほどは手持ちの運転資金でなんとかしのいでいましたが、3ヶ月目くらいからは折込収入がはいらなくなり小切手の金額を準備する見通しが立たなくなってきました。担当も小切手の金額を減らしてくれましたが収入の減少があまりに大きくて支払いに追いつきません。銀行借り入れで不足額を賄うしかないため借入額は膨れあがる一方でした。

そして、ついに令和5年7月に担当からこれ以上無理しても経営改善の見込みはないので廃業したらどうかと言われるようになりました。

8月17日支払期日の小切手の支払い金額の用意ができず、とうとう小切手が不渡りになり、銀行融資が受けられなくなりました。本社から小切手を不渡りにした以上今後の取引はできないと最後通告を受けるようになりました。私は銀行取引が出来なくなり融資を受けられませんので廃業を決意せざるを得ませんでした。

次の経営者が見つかるまでは読者に迷惑をかけることはできませんので、11月一杯で廃業することになりました。

私は信認金と代償金があれば、次の事業がなんとかできるのではないかとの思いがありましたが、本社からは新聞仕入代の未払いが8000万円以上あり全額それに当てるため渡せるお金はない、それ以外にも4000万円以上の未払金を支払ってもらう必要があると言われ愕然としました。銀行負債が5500万ほどありますので、1億円を超えるお金を裸一貫の私にどうやって返せというのでしょうか。私は、毎日新聞社のあまりの理不尽さに言葉

も出ませんでした。

それで、遠方でご迷惑と思いましたが九州の先生達に相談するようにした次第です。

7 現在の生活状況

毎日の仕事と銀行との返済や借り入れの相談などで将来のことを考える暇や余裕は全くありませんでした。販売店経営を早くにやめてほかの仕事や事業に転換することができた人は幸せです。私は不器用なタイプなので目の前の仕事をこなすのが精いっぱいでした。銀行負債が約5500万円も残っています。一生かかっても返済できる額ではありません。

毎日新聞社のため生涯をかけて頑張ってきた仕事の結果がこのような有様です。幸い私は妻や子供がいないので、以前からの知り合いの地元新聞の販売店経営会社の社長さんから新聞配達の仕事を手伝ってもらってなんとか生活できています。

現在、兵庫県■■■■の家賃4万7000円のアパートで一人暮らしをしながら、毎朝、200部ほどの朝刊を配達をしてから、午後は片道1時間以上かけて神戸市に通い、広告のポスティングの仕事をしています。

私のような被害者は大勢いますので、なにとぞよろしくお願いします。